家族への伝道・その2●

―相手を尊敬し尊重し、愛することが救いの始まりだった

札幌ゴスペルファミリーチャーチ 毛利光孝 牧師

前号に続いて、札幌ゴスペルファミリーチャーチの毛利先生にご家族への伝道についてお話を伺います。

―まず、おばあちゃんが信じて、そのことが後々、家族の救いの大きな足掛かりになったということでしたね。

毛利 はい、祖母が88歳で肺がんなった時、私はまだ、福音を伝えていなかったんですね。それで、祖母の心情に訴えて、イエス様を伝え、祖母は信仰を告白したんです。私はそのことを父親に話して、「洗礼だけでも受けさせてもらえないか」と頼んでみました。最初「だめだ」と断られたんですけれども、翌日、札幌に帰る前に父親に呼び止められて、「お前が心残りになるといけないから、好きなようにしてやれって、お母さんが言うんだ」と、許されました。それで、祖母は洗礼を受けることができたんです。

でも、そのことが父の弟の耳に入り、「何でそんな勝手なことをしたんだ」ときつく叱られました。

それからしばらくして、私は神さまの召しを受けて牧師になる道を考えるようになり、29歳のときに妻にそのことを話したんです。もちろん、すんなりと行くとは思っていませんでした。妻も信仰をもっていましたが、いやいやながら後ろ向きでついてきたような妻だったんです。もうすでに、1歳と2歳の子どもがおりました。私は、むりやり妻を説得しても、献身者としての生涯がうまくいくとは思いませんでしたので、祈って「妻の心を変えてください」とお願いしました。神さまが変えてくださらない限り、これは絶対うまくいかないと思ったからです。

―最初の反応はどうだったんですか。

毛利 もう、冷戦状態で、いっさい口をきかないというのがずっと続きましたね。でも、私も我慢して、祈り続けたんです。「神さま助けてください。妻の気持ちを変えてください」と。無理強いはしませんでした。そして、祈ったんですけれども、どんどん時間がたってしまって、年が明けてしまいました。2月初めには神学校に願書を出さねばならず、期限が迫った1月の中ごろに北海道で大きな聖会が2泊3日でありました。これに期待しました。子どもたちは私がみることにして、家内にすべての集会へ行かせたんですよ。集会で悔い改めて、泣きながら出てきて、私に「私が悪かった。私も一緒に神学校に行きます」と言ってくれるのを期待しながら待っていたんです。でも、毎回毎回ランララ～んという感じで帰ってくる姿にがっかりしました。結局、何も起きませんでしたねぇ。「ああ、だめかな」と思いながらもなお祈っておりました。そうしましたら、1週間ほどたった時に、「ちょっと話があるんですけれども」と言われました。そうしたら、妻が「私も神さまに従って神学校に行きます」と言ったんです。「え、どこでどうなったんだろう」と思いましたが、気が変わらないうちに「お祈りしよう」と言って手を取り合って祈りました。

―奥様はいつもポーカーフェースですね。

毛利 どうなんでしょう、少しクールなんですけど、妻も1年間悩んでいたんですね。「神さまは真実なお方だな」と本当にそのとき思いました。

そして、私の両親と家内の両親に「こういう事情で仕事をやめて神学校に行くことになりました、ついては、許してください」と手紙を書いたんです。

そうしたらもう、すぐ、父親から電話がかかってきました。職場にです。のっけから、怒なっていました。「光孝、退職届けを出したのか」「いや、まだだよ」「そうか、出さないで待っていろ、今すぐ飛んでいく」本当に飛んでくるような勢いでした。私は、「父さん、2月の11日にみんなで足寄に帰るから、話をしよう。それまで待ってくれない」と言って電話を切りました。そして、2月11日の建国記念日に足寄に帰りました。

―お父さん、いらいらしてたでしょうね、ずっと。

毛利 それでも、私のほうがどきどきでした。家内は、そうやって決心してくれたんだけれども、決心したばかりで、いやいや不承不承のような感じでずっと私についてきた妻だから、両親に反対されたら気持ちがひっくり返るんじゃないかと心配したんですよ。それで、札幌を出るとき、「もしも、両親に勘当するって言われたら、『分かりました』とすぐに帰ってくるよ」と、言ったんですよ。そしたら、妻は「分かっています」と答えるんです。私は少し気持ちが強くなりました。そして、足寄の家に着いたら、両方の両親が待っていて、すごい緊張した空気が張り詰めていました。

―毛利先生のお父さんお母さんだけじゃなかったんですか。

毛利 そうなんです。4人でね。私たちは、自分たちの気持ちを率直に話したんです。

私たちの話が終わると、父が怒なり始めました。家内の父は嫁に出した立場ですから、何も言わなかったのですが、それを察してその分、私の父が激しく私たちをしかり、そして何とかその意思を翻させようとして、いろんなことを言いました。「光孝、宣教師の先生に聞いてきたけどな、牧師になるってことは、人様からお金をいただいて生活するっていうことだ。そういうことは、子どもができる前にやるもんだ、もう遅すぎる。あるいはな、子どもが大きくなってからやれ、早すぎる」いろんなことを言うんですよ。しかし、「私たちの気持ちは、変わりません、なんとか許してください」と、二人してお願いしました。すると、母親がですね、「そんなに神学校に行きたいんだったら、母さんを殺してから行け！」と言い出したんです。

―おお。

毛利 母が叫んだんですよ。私はすぐに母の気持ちが分かりましたね。母は愛する息子を不幸にしたくない、そのことのためには自分の命を犠牲にしてまでも阻止すると言う、強い激しい思いだったんです。私はすっかり動揺してしまいました。

―それで、どうされたんですか。

毛利 いやあ、私はね、なんて答えたらよいか分かりませんでした。私の動揺した姿を見て、母は何度でも繰り返すんですね。「私を殺してから行け」と。私は、もう、顔を上げることができません。母親はにじり寄ってきます。そしてね、顔を上げてみたら、目の前に母が来ていて、涙をぼろぼろ流しながらまた叫ぶんですよ、「お母さんを殺してから行け」って。参りましたね。

私は下を向いて、すばやく祈りました。「主よ、なんて答えたらよいのですか」すると、すぐにみことばが来ました。「わたしよりも父や母を愛する者は、私にふさわしい者ではありません」（マタイ10・37）

―確かにその通りですね

毛利 いやあ、きついな、この期に及んでまだ私のことを試すのか、と思いました。でも、すぐ答えました。「主よ、分かりました。もう一度母が同じことを言ったら、私は『そうします』と答えます」

するとまた、母が言ったんですよ。「母さんを殺してから行け」「分かりました。お母さん、息子をなくしたと思ってください」と言ったんです。そのとき、また思いもしないことが起こりました。黙っていた妻が叫びだしたんです。最初は私に向かって叫んでいるんだと思いましたよ。「こんなことになると思ったから、いやだったのよ」とでも言ったかと。でも、よく聞いてみると、「お母さん、どうして私たちにそんなことまで言わせるんですか」と叫んでいるんです。

「私たちは、お父さんお母さんの子どもです。どうして私たちをそこまで追い詰めるんですか」「私たちのことを信じてください」と。妻も泣きながら叫んでいました。そうしましたら、今度は、今まで黙っていた妻の父がどなったんです。「美智子、お前は黙っていろ」と。そしたら、今度は妻が泣きながら自分の父親に向かって何か叫んでいるんです。みんなが泣きながら叫びだしました。もう、だれがなにを叫んでるんだか分からないような状態です。「ああ、これはもう、10年も20年も家には帰れないな」と思いました。それで、もう帰ろうと思って二階に荷物を取りに行って、下に降りてきたら、まだ怒なりあっています。妻に、「いいからもう帰ろう」と言いました。すると、私の母が「もう昼になるのに、子どもたちに何も食べさせないで帰るのか」食事どころではないな、と思ったんですが、母が自分の命を挺してしてまでも、子どもたちを不幸にしたくないと思って涙を流した、その愛情に応えなければならないと思い、「それじゃ食事だけいただいて帰ろう」と言いました。母と家内が支度をして全員が座ったんです。そうしましたら、あれだけ、みんな腹の内のことを叫んだせいか、すとんと、なんか静かになってしまいましてね、家内の父親が言ってくれたんですよ。「おれたちはもう何も言わない、お前たちが決めたことなんだから、好きにしていい。でもな、不幸にだけはなってくれるな」と。それを聞いて、私の父も安心したんでしょう。「おれも、もう何も言わない。だけどな、生活のことは応援できないぞ。自分たちでちゃんとやれ」と言いました。

「主は真実な方だな」と思いました。私は「息子を失ったと思ってくれ」と言って両親を神さまに捧げたんです。そうしましたら、30分もしないうちにその両親を戻してくれました。

私たちは晴れて神戸の神学校に行くことができました。そして、家内と一緒に4年間神学校の勉強を終えて、母教会に戻って副牧師になりました。

10年ぐらいたった時に、主任牧師の先生が突然「来年、私と主任牧師を交代しよう」と言い出したんです。まだその先生は50代半ばでしたので、「いや、先生、まだ早いですよ、もう少し時間をかけて交代しましょう」と固辞しました。でも、私の意見は通らなくて、次の年、私が主任牧師になりました。すると、やはり予想した通り、船頭が二人という状態になって、教会の運営が非常に難しくなってしまいました。それで、私が身を引いた方がいいな、と思うようになり、主任牧師になって半年ぐらいたってから、家族だけで祈り始めました。何とかこの1年間頑張ろうと思って続けていたんですが、私は睡眠障害になりまして、疲れ切ってしまいました。その年の12月31日が日曜日でした。私は30日の日に実家に電話を